

佐保山

世阿弥作

前

ワキ

藤原俊家

シテ

里女

ツレ

同行の里女

後

ワキ

前に同じ

シテ

佐保姫

地は

大和

季は

春

「立つ旅衣春とてや。く。心ものどけかるらん。

詞
「抑是は藤原の俊家とは我事なり。さても和州春日の明神は。氏の神にて御座候ふ間。参詣申さばやと存じ。只今和州に下向つかまつり候。

道行
「天の戸の。明け行く空の朝ぼらけ。く。霞を分けて白雲の。衣雁金こしかたを。よそに南の都路や。春日の里に着きにけり。く。

詞
「急ぎ候ふ程に。是は早春日の社に着きて候。又あ

の佐保山に何とやらん衣のやうに見えて候。立ち越え見ばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲
「日にみがき。風にさらせる玉衣の。晴るゝ日影もにほふなり。

ツレ
「佐保山姫の雲の袖。緑もなびく景色かな。

シテサシ
「おもしろや名所はさまぐ多けれども。分けて誓ひも影たかき。

二人
「天の児屋根の神代より。誓ひの末も明らかき。月

に照りそふ春日山。弘き恵みの有難さよ。殊更に時もあひあふ春の日の。東を知るも鹿島野や。緑も同じ若草の。山は南の都の空。曇らぬ神の時代かな。

下歌
「こゝはとりわき佐保山の。其山姫の衣ほす。袖白妙の露かけて。

上歌
「玉葛。来る年の緒の春毎に。く。霞の衣緯薄き。糸の乱れも天つ日の。のどけき色に染めなして。猶白衣のうらゝなる。空や雲間に、ほふらん。く。

ワキ詞
「我佐保山に登り。四方のけしきを詠むる処に。いとなまめきたる女性。妙なる衣をさらせるけしき見えたり。そも御身は如何なる人ぞ。

シテ詞
「さん候是は此佐保山のあたりに住む女にて候。又これなる衣は所から。よしありてさらせる衣なり。立ちよりてよくく御覧候へ。

ワキ

「実にくく此衣をよりて見れば。銀色かゝやき異香薰じ。誠に妙なる白衣の。よくくく見れば縫ひめもなし。こはそも如何なる衣やらん。

シテ
「げによく御覧じとがめて候。是は人間の織る衣にあらず。或る歌に。裁ち縫はぬ衣きし人もなき物を。何山姫の布さらすらんと。かやうによみしも此衣なり。

ツレ
「もとより山に住む人の。人間の交はりなき故に。

かかる衣も世の常ならず。

シテ
「然れば仙人の衣をば。

二入
「裁つともなく縫ふ事も。なき世のためしば稀にだに。いさ白衣の羽袖の色。妙なりと御覧候へとよ。

ワキ
「實に裁ち縫はぬ衣の事。仙人の衣と聞きしなり。さては仙境に入りぬらん。然らば御身は仙女にてましますか。

シテ「いや仙女まではなけれども。所は佐保の山人なれば。
ば。もし佐保姫とや申すべき。

ワキ

「不思議やさては佐保姫の。霞の衣とよみたれば。

シテ

此裁ち縫はぬ薄衣も。もしは霞の衣やらん。

シテ

「そも裁ち縫はぬ衣なればとて。

ワキ

「霞の衣かと尋ねしは。

シテ

「あら謂なの御言葉や。裁ち縫はぬ。衣ほせばとて
佐保姫の。く。袖も緑の糸はへて。縫ふ事はな

8

くとも。霞の衣ならば。裁つことはなどかなる
べき。是は裁ちもせず縫ひもせず。まして糸もて
織る事も。嵐になびく羽衣の。袖も裾もにほやか
に。うらゝなる日にさらすなり。うらゝなる日に
やさらさん。

地クリ

「夫れ天地開闢の昔より。山海草木に至るまで。万

物悉く成仏して。皆靈験の神所たり。

シテサシ「とりわき四季を司どる事。まづ春を守る神といつ

9

ば。

地「此山姫の神徳として。草木森羅万象まで。御影の緑満ち満ちり。然れば所の名にしおふ。佐保の山家の恵み深く。千秋万徳の春を得て。佐保山姫と顕はれ給ふ。

クセ
「たが為めの。錦なればか秋霧の。佐保の山辺を立ち隠すらんと。ながめけるも此山の。妙なる秋のけしきなり。かやうに治まれる四つの時。いく年々を送りけん。花の春。紅葉の秋の夕時雨。古きを守るためしまでも。あふぐや青によし。奈良の代々ぞ久しき。殊更此山は。春の日影もよそならで。慈悲万行の神徳の。弘き誓ひの海山も。皆安全の国とかや。

シテ
「そもそも蘆原の国つ神。

地「代々に普き誓ひにも。御名はことに久堅の。天の児屋根の其かみ。此秋津洲の主として。皇孫をい

つき給ひしより。八島に治まる時つ風。四海に畠
む波の声。万歳を呼ばふ三笠山。御影もさすや川
竹の。佐保の山辺の春の色。万山ものどかなりけ
り。

ロング地
「實にや誓ひものどかなる。く。佐保の山姫あら
たなる。言葉をかはすうれしさよ。

シテ
「暫く待たせ給ふべし。とても山路のおついでに。
佐保の山の神祭。月の夜遊をはじめん。

地
「月の夜遊と聞くよりも。東の嶺に光さし。

シテ
「南を見れば春日野の。

地
「三笠の森に花降りて。

シテ
「こゝにたなびく。

地
「山の名の。さをなぐるまの夢の夜の。程を待たせ
給へやと。夕霞の衣手に。立ち隠れつゝ失せにけり。
立ち隠れ失せにけるとかや。 (中入)

「佐保山の。柞の緑片敷きて。く。こゝに仮寐の

枕より。音楽聞え花降りて。月春の夜ぞ有難き。

く。

後ジテ
「春日野の。飛火の野守出でゝ見よ。影さす月の三
笠山。薄雲かゝる藤山の。わかむらさきの名にし
おふ。木々の梢ものどかなる。春の日影のゝどけ
さよ。

地「二月の。初申なれや春日山。

シテ「峰とよむまで。いたゞきまつれや佐保姫の。袖も

かざしの玉かづら。

地「かけてぞ祈る春日野の。

シテ「若草の山。水屋の御影。

地「みどりもめぐみも春たつ雲の。羽袖をかへすや山
かづら。(真の序の舞)

「神楽の鼓春を得て。く。月の夜声も澄み渡る。

心をのぶる有難や。

ロンギ地

シテ「こや佐保姫の小夜神楽。時の鼓の数々に。神歌の

一節。佐保の歌とや云ひてまし。

「それは遊女のうたふなる。声も妙なり天乙女。

シテ
「天の探女の古を。

地
「思ひ出づるや。

シテ
「久堅の。

地
「月の御舟の水馴棹。山姫の袖。かへす霞の薄衣。
裁ち縫はねども白糸の。来る春なれや永き日に。
雨つちくれを動かさで。世を守る佐保姫の。めで

たき例なるべしや。めでたき例なるべし。